研究主題 1

子どもたちの目の輝きをめざします

ハイライト：子どもの目の輝き

・どんなときに、目は輝きますか？　～主題設定の理由～

・子どもの目が輝く学習をめざしています　。～主題の意味①～

・算数・国語でめざす目の輝きとは　～主題の意味②～

・指導内容の習得・活用が「目の輝き」　～主題の意味③～

・子どもの目が輝く姿は、自尊感情の高まり　～主題の意味④～

どんなときに、目は輝きますか？

私達教職員は、子どもたちのよりよい成長をめざして、日々研修を重ねてきています。それぞれの学校で行われている研修会において、次のような問いを投げかけられたら、どのように答えられますか？

「このような授業研修会で、先生方の目が輝く時はどんな時ですか。」

久原小学校の研修会では、「明日にでも使えるものを学んだ時」「新しいものを学んだ時」「自分の課題が解決した時」等、様々なものが出されました。

研修会の中で、新たな発見や価値を見い出したり、自分の指導に役に立つことを得たりした時、私達教師の目は輝いているはずです。また、その時の教師の目の輝きの大きさは、研修にどれだけ本気になって取り組んでいるか、どれだけ切実感をもって取り組んでいるかによって変わってきます。

研究授業後、授業を行った職員が、講師の先生から個別に指導を受けている場に同席しました。その時の職員の目はまさに輝いていました。それは、授業づくりに本気で取り組んでいたからこその輝きであり、自分の課題が解決したからこその輝きだったのです。

このような「教師の目の輝きを生み出す研修」と久原小学校がめざしている「子どもの目が輝く学習」とは、実は同じものなのです。子どもの目が輝く姿を、自分の研修での経験と置き換えて考えていくことが大切です。

久原小学校の子どもたちの目は輝いているでしょうか？私達は、常に子どもの目の輝きにつながる授業づくりをめざし、今日の取り組みを明日へとつないでいきます。

子どもの目が輝く学習をめざしています。

久原小学校の研究テーマは、次のように設定しています。

子どもの目が輝く学習の創造 ～聴き合い・語り合い活動を中心に～

では、子どもの目が輝く姿とは、具体的にどのような姿になるのでしょうか。

久原小学校がめざしている「子どもの目の輝き」は、単に子どもたちにとって楽しい学習活動を設定し、笑顔で目をキラキラさせていくことではありません。子どもたちが、学習に本気になり、切実感をもって学習に取り組んでいる時に生み出される学びの姿をめざしています。

例えば、算数の学習では、提示された問題に対して、「えっ、なぜ」「どうしてだろう」など、自分の知識とのズレや矛盾が生じた時、学習への意欲が高まっていきます。このような時、子どもたちの目は輝いていると捉えています。

また、交流活動を通して、「わかった。そういうことか。」「なるほど。」など、自分の考えと比較して学習内容についての理解を深めたり、価値を実感したりしている時にも、子どもたちの目は輝いていると捉えています。

このように、子どもの目の輝きとは、学習過程のすべての段階で生み出していくことができるのです。

算数・国語でめざす「目の輝き」とは

算数では、「思考力・表現力」の育成を中心に授業づくりをすすめています。めざす「目の輝き」は、次のような思いを表出する子どもの姿となります。

① 問題への意欲が高まっている姿
「えっ。なぜ？」
「よし、できそうだ！」
② 有用感・効力感を味わっている姿
「うん、すごく簡単！」
「あっ、わかりやすい！」
「おー、いつでも使える！」
③ 成就感・達成感を味わっている姿
「やった、できるようになったぞ！」
④ 新しい目標を感じている姿
「今度は、○○に挑戦だ！」

国語では、「読むこと」を中心に授業づくりをすすめています。めざす「目の輝き」は、次のような思いを表出する子どもの姿となります。

① 読みへの意欲が高まっている姿
「うわぁ、読んでみたい。」
「よし、こう読んでいこう。」
② 読みの深まりを味わっている姿
「なるほど、そういうことか！」
「へぇー、その読み方もあるんだ！」
③ 成就感・達成感を味わっている姿
「うん、しっかり読めてよかった。」
「やった、○○ができたぞ！」
④ 新しい目標を感じている姿
「よし、もっと読みたい！」

子どもの目が輝くと、自尊感情が高まります。

指導内容の習得・活用が「目の輝き」を生み出す

ここまで、子どもたちが学習活動に関心・意欲を高めて取り組んでいる姿を「目の輝き」として述べてきました。

しかし、私達がめざしているものは、子どもたちが学習に対して、関心・意欲をもって旺盛に活動していくことだけではありません。目を輝かせながら学習に取り組んだ子どもたち一人一人が指導内容をしっかりと理解していくことできてはじめて、研究主題を具現化できると捉えています。子どもたちの目は、学習単元で身に付けさせたい知識・技能や考え方を習得・活用できたからこそ輝くのです。

そのために、学習指導要領の指導内容に基づき、言語活動や算数的活動の工夫を行ってきています。

研究をすすめていく過程では、サブテーマに掲げている手だてを意識して授業づくりしていきます。久原小学校では、「聴き合い・語り合い活動」が中核となる手だてとなります。しかし、よりよい聴き合い・語り合い活動をつくり出すことが目標ではなく、あくまで、指導内容を確実に習得・活用できる子どもを育てていくことをめざしています。指導内容の習得・活用が「目の輝き」を生み出していくのです。

子どもの目が輝く姿は、自尊感情が高まっている姿です。

国語科と算数科では教科の特性により、子どもの目が輝く姿の捉え方は異なります。しかし、どちらの学習においても、子どもたちは、学習活動に本気になり、切実感をもって取り組んでいます。そして、その成果として、達成感を感じることができているのです。

このような学習を通して、成就感・達成感を味わわせることは、自尊感情を高めていくことにつながっていきます。1時間の学習の中で、子どもたちは、様々な「目の輝き」を表出していきます。指導内容がしっかりと習得・活用できているかどうか、発言やつぶやきだけでなく、細かな様相まで見取っていくことが必要となります。

また、その「目の輝き」が生み出された要因（手だて）は、何なのか分析し、評価していくことも大切です。

研究主題 3

聴き合い・語り合い　～ＡＫＢ大作戦～

ハイライト：聴き合い・語り合い

- **「聴き合い・語り合い」は、「伝え愛」の場**
- **発達段階に応じた「聴き合い・語り合い」の姿**
- **「聴き合い・語り合い」が効果的な場とは**
- **「聴き合い・語り合い」を生み出す手だてとは**
- **「聴き合い・語り合い」を支える3 つの条件整備**

「聴き合い・語り合い」は、「伝え愛」の場

子どもの目が輝く学習をつくり出していくための中核となる手だてとして、「聴き合い・語り合い活動」を設定しています。

「聴き合い・語り合い」の意味を考えると、「伝え合い」と言い換えることができます。しかし、久原小学校がめざしている交流活動は、「伝え合い」ではなく、「伝え愛」なのです。具体的には、次のような姿になります。

・心で聴いて相手を理解しようとする。
・正しい言葉で自分の考えを表現する。
・相手の考えのよさを認め自分の考えを生かす。

交流活動における子どもたちの表現を、自分も相手も尊重する表現（アサーション）へ高めていくことが、子どもたちの目の輝きにつながっていくのです。

それでは、授業におけるアサーションとは、どのようなものになるのでしょうか。具体的には、次のような姿をめざしています。

【聴き合いの姿】
・相手の考えを、ただ漠然と聞くのではなく、自分なりの考えを明確にもち、自分の考えと比べ、相手の考えの意図を予想しながら聴いている。
【語り合いの姿】
・自分の考えを、表現を工夫して、相手にわかりやすく伝えている。
・相手の考えを評価し、自分の考えを付加・修正・強化して伝えている。

久原小学校では、聴き合い･語り合い活動を中核とした授業づくりをＡＫＢ大作戦（アサーション・クバラ・ビルド）として研究を進めています。

発達段階に応じた「聴き合い・語り合い」の姿

前述の「聴き合い・語り合い」の姿を、発達段階に応じて具体化すると次のようになります。

【低学年】･話し手を見る･うなずく･最後まで聴く･体の向き･声の大きさ･最後まで話す･理由をつける･順序よく話す
【中学年】・自他の考えを比べて話す･結論と理由を話す･具体物を使う･根拠をもとに話す･自分の立場を明らかにする･相違点や共通点を考えながら話す
【高学年】・メモしながら聴く･相手の考えを引用して話す・考えの根拠を事実やデータをもとに話す・要点をまとめたり例えを使って話したりする。

このように整理していくと、日常の授業で先生方が行っている交流活動そのものになるのではないでしょうか。「聴き合い・語り合い」を難しく考えるのではなく、今まで積み重ねてきた当たり前のことを、改めてしっかりと実践していくことが大切なこととなります。

低学年で培った「聴き合い・語り合い」の姿は、中学年での「聴き合い・語り合い」の姿につながり、さらに、高学年での「聴き合い・語り合い」の姿につながっていきます。発達段階に応じた「聴き合い・語り合い」を創り出していく時に、次の学年での姿をしっかりとイメージしていきます。

「聴き合い・語り合い」が効果的な場とは

授業づくりをすすめていくにあたって、「聴き合い・語り合い」の場が有効に機能する単元や指導場面を考えていく必要があります。

「聴き合い・語り合い」の場は、学習過程のどの段階にも設定することができます。しかし、授業の目的は、あくまで指導内容を達成することにありますので、「聴き合い・語り合い」によって育成される教科の能力をはっきりとさせておかなければなりません。その上で、指導内容にふさわしい「聴き合い・語り合い」の場を設定していくことになります。

このようなことを考慮すると、算数の授業では、数学的な考え方（思考力）を育成する場面で、「聴き合い・語り合い」の場を設定していくことが効果的となります。ただし、数学的な考え方の育成は、集団解決の段階における交流活動に限らず、その内容と方法を工夫することで、他の段階でも設定することができます。

国語の授業では、指導事項に応じた言語活動として設定し、話す・聞く能力、書く能力、読む能力を育成していくことになります。その授業でどのよう能力を育成するのか、つまり、授業の評価規準によって、「聴き合い・語り合い」を設定する効果的な場は変わってくるのです。

ＡＫＢ大作戦は、聴き合い・語り合いをすべての子どもたちができるようにすることです。

「聴き合い・語り合い」を生み出す手だてとは

「聴き合い・語り合い」の場を、より質の高いものにしていくためには、どのような手だてを仕組めばよいのでしょうか。

久原小学校で一番大切なこととして挙げていることは、考えをしっかりともたせるということです。自分の考えが曖昧なまま交流活動に臨んだ場合、めざす「聴き合い・語り合い」の姿を生み出せないのです。自分の考えをしっかりとつくることができるように、時間を確保するとともに、よりきめ細やかな支援を加えていくことが、「聴き合い・語り合い」の場を成立させる第一歩となります。

一人一人の子どもたちに自分の考えをもたせた上で行う手だてについては、多面的に工夫していくことができます。

- オープンな問題を設定する
- 問題提示の方法を工夫する
- グループ（ペア）交流の設定
- 発問、補助発問を工夫する
- 板書を構造化する
- 学習ノートの構成を工夫する
- 友達の考えを説明させる

この他にも、先生方のよさを生かした工夫により、多様な手だてを生み出していくことができます。

「聴き合い・語り合い」を支える3 つの条件整備

「聴き合い・語り合い」の場は、子どもたちが「やりたくないなぁ」、「どうしていいかわかんないよ」、「まちがっているから言いたくない」、「自信ないよ」などマイナス思考の気持ちと行動に走ると成立しません。

そこで、次の３のポイントを授業をつくる条件整備として、事前にしっかりと行っていきます。

1 語り合いたいという意欲がわく課題や教師の発問づくり
2 聴き合い・語り合いができる支持的風土づくり
3 発達段階に応じた交流のルールづくり

このような条件整備が基盤となり、真の「聴き合い・語り合い」が生み出され、子どもたちの目が輝いていくのです。